

# 経済情勢

## 概観

### ◇世界貿易に縮小化のきざし

米国の鉱工業生産指数は、4月も126と前月比2ポイント続落し景気後退の進行を物語っているが、その他の経済指標の中には景気後退の下降テンポの緩和を示すものが散見されはじめ、またカナダの景気後退も下降から横バイに転じつつある。一方これまで概して好況を続けていた西欧諸国は漸次海外における景況不振の影響を受け、英国・オランダ・ベルギー・北欧3国などでは経済活動が低下しつつあり、また国内経済がなお活況を続けている西ドイツ・イタリア・スイス・オーストリアなどでもその拡大傾向には鈍化が見られる。国際商品市況は下げ渋り低迷状態を続けているが、価格低落が主として供給国側における生産制限により食い止められた事情から、後進諸国における実質所得は減少し、外貨事情好転の見込は乏しい。その他国際収支の好調と国内開発の進捗から経済活況を呈していたベネズエラ・メキシコなども景気頭打ちの状態にあり、今や経済調整過程が世界各地に波及しつつあることはいなめない。

かかる情勢を背景として、米国はもちろん多くの工業国（フランスを除く）において公定歩合の引下げなど金融緩和と政策が採られつつあるが、国内になお潜在するクリーピング・インフレーションの圧力からその態度も自ら慎重であり、一方後進諸国においては外貨事情のひつ迫から輸入制限を強化する国が多くなりつつある。このため多くの国において貿易の縮小均衡傾向が見られ、今後世界貿易は伸び悩みなし減退の傾向をたどり、世界経済の調整過程もやや長期化する恐れがある。

このような世界経済の現状にかんがみ、最近国際流動性増大のため金価格引上げ論やCommonwealth Bank創設の構想など国際的解決の必要が唱えられつつあることは注目を要する。

### ◇三つの特徴的現象とその意義

——金融の緩和傾向、国際収支の縮小均衡、  
底入れ現象の後退——

4月から5月にかけての国内金融経済情勢にはかなり顕著な三つの特徴的な動きが看取された。その第1は金融の緩和傾向が財政の著しい散超を契機として明確に表面化したことであつて、金利情勢にも若干の変化が生じつつある。第2は国際収支の縮小均衡であり、昨秋来の黒字は引続いて維持されているが、輸出入のいずれもが縮小し、海外景況が懸念されている折から大きな注目をひいた。第3には3月ごろかなり一般化した商品市況の底入れ模様が早くも薄らぎ、このところむしろ反落商情すら呈していることが指摘される。

いうまでもなく自由な経済においては市場における需給関係こそその脈搏とも称すべきものであり、中でも特に注目を要するものとしてはまず金融市場・国内商品市場および貿易市場に指を屈しうるのであろう。この三つの市場におおむね時を同じくして上記のごとく特徴的な動きがみられたのであつて、その意義についてはなおざりにし難いものがあるといわねばならない。

景気の上昇期には金融は締めり下降期には緩む。最近の金融緩和の中には特殊な財政事情など人為的ないしは偶然的な要素もあるが、その中心をなしているものはやはり景気の循環過程における必然的な現象といつていいだろう。企業界の資金需要はある程度減退してきたし、外為会計の散超や現金需要の停滞も明らかに景気の後退とともに生じたものといえる。こうして資金需給が緩む段階にさしかかったわけであるが、しかしこの緩和はまだ入口にすぎないのであつて、果して本格的なものかどうか、換言すれば景気を循環的に再上昇させるように働くかどうか、また働かしてよいようなものかどうかは、総合的に判断しなければならない。時あたかもわれわれは貿易の縮小という事実につづかつた。しかも経済界の多くの人に希望を抱かせた商品市況の底入れも事実によつて否定されつつあるかのごとくにうかがわれる。上の設問に肯定の答をなしうる段階はまだ先のこととみておくべきであらう。